

その子の母になつた日には
自分達の父母の今をおもうて
人の子の親のいとしさを思ふことであらう
はてしなき親子につながる愛の真実よ
それは真珠より、星より、もつと清く、かなしく、うつくしい。

夢

この頭韻十二音四行詩は、わが詩友佐藤一英の創唱する詩型にして、名づけて聯と言う。その頭韻を冠するところに一の工夫あり。その自らにして作者の無意識界を表現するところはその特長とすべし。われ夙にこれを喜び、敢えてこの旧友の驥尾に附して、ここにいろは四十七篇を得たり。もとより消閑の戯技に属す。然れどもなおわが意識の深層を発見するを得て、たのしまずんばあらず。故に後賢の嗤笑をおそれず、敢えて自らここに録す。

いしづみの 字のよみがたく
いにしへは とふによしなし
いくさびと ほねさへくちて
いばらのみ ちにはびこれる
るばのみみには はるのかぜ
るじのおくには さくらばな

老子のふみき　ひもとけば
ろうこうもまた　たぬしけれ

はじめの　くちにひびきて
はじめは　わすれかねつる
ハライソは　みにとほくして
ハブのどく　こころにふかき

にらのはな　さけるゆふぐれ
にほふがに　そらにかかれる
しんげつに　われこととはむ
にひつまは　いつたまうらん

ほにいでし　すすきつづきて
ほのみやま　あきたつらんか
ほのかなる　おもひなりけり
ほほしろき　おとめしぬばゆ

へのへのもへをかきたりし
へちまのさがるくらのかべ
へんろにうたをならひたる
へそがたやまのゆうべかな

とらよりも　なほしこわしと
としおひし　ひとらいふなり
とりあぐる　みつぎとりども
としどしに　いきをひたけし

ちよろづのおもひぞひそむ
ちぬのうみけふなみもなし
ちはやぶるいにしへのこと
ちぢにわがむねにわきくも

りにかてば　ひとはつめたし

りをおへば ひとあやうし
りめんをば ただつつしめよ
りらんみな きみをまもらん

ぬばだまの よのやちまたに
ぬしもとめ さまよひくれば
ぬかるみは さびしかりけり
ぬるるそで なみだもしとど

るりのそら はるとなりけり
廬遮那仏 びなんにおはす
るいだいの はかをしぬびて
るろうの身 われをかなしむ

おきなごの こころきよらに
おくつきに ねむれるひとの
おもかげを むねにまがきて

おろがむを みればなかゆる

わかくさを しきてうたひし
わかき日の ゆめはたいづこ
わかれ来し 日のはるかにて
わびしもよ 老ひのころは

かくるるは あらはるるなり
かなしみは よろこびのもと
かちどきに ほろびはひそむ
かくのごと わがひじりいふ

よろこびは かなしみのもと
よきごとは あしきのはじめ
よにつとふ われのねがひは
よしあしを こえて生くみち

たちばなの はなのしたかげ
たちつくし ひとをおもへば
たそがれは ものがたりめき
ただにのみ おもひはふかし

極子窓 うめは匂へり

麗人は こもりてふかし

玲瓏の 珠をいただきて

廉潔に わが身を生きむ

そこはかと かほるものあり
そのうめ ほころびけんか
そだたきて 茶にしたしめば
早春の 夜のしづかなる

露しげき あさのをゆけば
月のこり しろくかかれり

つかあをき かなたのそらに
つくばねの かすむむらさき

ねむのはな たにまに咲けり
ねりぎぬの あはきかなしみ
ねがひただ うたにのみあり
ねのみきく せきれいのこゑ

ながれゆく みづのおもてに
なにごとを わがかきけらし
なをもとむ ところあらねば
なみのごと きえてあとなき

らいせいほ ひとにまかせむ
らくえんは われにとほかり
らんのはな かほるりんちに
らくやきを ひとりたのしむ

むぎのなみ とほくつづきて
むさしのは すでになつかも
むらさきに 野川ひかりて
むらみちは しろくつづけり

うきくもの ながるるごとく
うたかたの きえゆくごとく
うきことも はたよろこびも
うせはてて 老のひは来ぬ

あしのしの しろききばより
あぶぎねの しろきゆきより
あましつる ひのしぬばれて
いまさらな みこそこひしえ

〔註〕「みこ」は日本武尊。恋いする人は尾張の美夜受比売なり。尊は伊服岐山の白猪の吹く毒にあてられて伊勢にて薨じたまへり。

のぢのはて かすむやまなみ
のきちかく まつのはなちる
のろはしき ひはすでにきえ
のぞみもち けふをわがあり

おしばなの にほひきゆとも
おもひでは きゆるひのなし
おさなどち われら摘みけり
おかのへの はるのはなばな

くにとほく さかり来し身に
くりのはな にほふおそはる
くぐつらの うたふうたこゑ
くしくわが こころかなしむ

やまなみは あをくけぶれり

やすのかは ひにひかりつつ
やほよろづ かみつどひまし
やすらぎの うたげしたまふ

まつのはな こぼるみてらに
まゆしろき おきななりけり
まかえんの ぎようじやなりけり
まむかひて すがしかりけり

〔註〕 まかえん（摩訶衍）仏教の大乗を言う。

けきころも わかき尼僧や
けしのはな いけてすがしき
げあんこの そうどうしづか
けいせいに のりのこゑきく

〔註〕 げあんこは夏安居、禪家の夏百ヶ日の坐禪修道期間。

ふぢのはなさく やまみちに

ふるさとびとと あひにけり
ふたりたちみる やまのはに
ふつかつきこそ かなしけれ

〔註〕 ふつかつき、二日月。

こぶしさく ぬまのはるかな
こもりあの うたびとあはれ
こうたきて ことりききつつ
古峽とき みちたのしめり

鯉しろし はつあきのかぜ
エメラルド うみはなみなし
えがほよし わかきともどち
えらばれし けふのよきひよ

てのひらに もじをかきけり
てりはゆる おもはなりけり

てぶりよき まひにありけり
てをとりて かなしかりけり

あめいろの そのぬけがらを
あじさひの はうらにつけて
あさかぜの にはにもぬけぬ
あをきせの あぶらぜみなる

さにづらう おとめなりけり
さちおほき ひにぞありけり
さしぐみて ものをしおもふ
さなり そも またよかりけり

きりこめし はつなつのあさ
きざはしの なめいしのへに
きりのはな ちりてにほへり
きらめくは つゆのたまかな

ゆきゆきて おかをのぼりぬ
ゆるやかに ひらく目路かな
ゆうつきは そらに匂ひて
ゆめのごと そばのはなさく

めぶくきぎ とほくつづけり
めじのはて ふじもかかれり
めだかごも およぎそめたり
めぐしごよ はるはきたりぬ

みちわたる いのちなりけり
みちのべの 小さきはなにも
みなそのの 小さきいしにも
みえぬ目の やみのそこにも

しそのみの あをきあさより

しんげつの にはふゆうより
しんふかき おとめのめより
しんじつに きよきはあらじ

ゑにならぬ ゑをばゑがかむ
えてなきを えてとわがせむ
えぬことを えるとはなざむ
ゑがきみる 老聃のゆめ

ひととほく わがわかれきて
ひるふかき ぬまにこもれば
ひしのみ あをきかなしみ
ひめしわが おもひなりけり

もすなきて ひるしづかなり
もりのおく このみはうるる
もとめなく 無為に坐しつ

妄想の ゆめをたのしむ

せせらぎの みづはぬるみて
せりのめも あをみそめつつ
せにぬくき はるひなりけり
せきれいの こえのきこゆる

すずのねにこそ あきたちぬ
すみふるしたる いへなれど
すやきのかめに はないけて
すがしきあさを めでにける

500部限定124
第13号

無為隆彦

定本 無為隆彦詩集 限定五百部

定価 一五〇〇円

発行 昭和四十一年二月十日

著者 無為隆彦

発行者 青木美也子

発行所 神無書房

東京都北区西ヶ原二一七一
電話(九一九)四三七九番
振替口座 東京四〇〇八二番

光陽印刷株式会社印刷 北伸社製本

著者の諒承により検印は廃止します

定本

無爲陸

詩集

神無書房